

多岐にわたる コンゴ難民への援助

南部アフリカの国ザンビア、ルアブラ州北部に、私の担当するカラ難民キャンプがある。近隣5か国を巻き込んだコンゴ民主共和国（旧ザイール）での戦争を逃れ、ザンビアに流れ込んだコンゴ難民のキャンプで、2000年8月に設立された。まだ2年ほどの比較的新しいこのキャンプの人口は、2002年9月現在、1万7542人。東部コンゴの情勢は不安定で、いまだに月200 - 300人ほどの難民がキャンプに着く。ここでUNHCRは、ザンビア政府、他の国連機関、NGOと、医療、教育、農業、環境、建設など、多岐にわたる援助を行っている。

キャンプの設立前は野原だったこの土地は、幸い水に恵まれている。キャンプのわきの小川の水は、ポンプで汲み上げられ、消毒後、水道を通してキャンプ各区に届けられる。水を管理しているのは難民である。

キャンプにはUNHCRのパートナーNGOの運営するクリニックがある。栄養不良の子どものための給食センターも併設されている。母子保健、コミュニティを主体とした保健士、助産婦による保健医療も少しずつ進んできている。

小学校には、9月からの新学期に前学年以上の子どもが集まった。教育を重要視しない親が多いのが問題であると、同じく難民である校長を始め他の先生も、より多くの子どもがキャンプで学校に行けるようめざしている。中には学校に行くのはここで初めてというティーンもいる。UNHCRは、就学機会のなかった大人のためにスワヒリ語（東コンゴの日常言語）やフランス語（コンゴの共通語）の授業を行っている。

食糧は配給されるが、好きなものをお腹一杯食べることはできない。食糧供給の安定をめざし、畑を耕す意思のある難民には、UNHCRから種と農具が配られる。このプログラムは雨期の9月から二期目が始まる。今年はザンビア政府の協力によってより多く難民に土地が割り当てられた。とはいえ予算は限られており、農業をしたい難民の約半数が、今期、種と農具を受け取り、残りの人々は来年にならざるを得ない。

難民キャンプでよく心配されるのは環境への影響である。特に料理に不可欠な薪をどうやって賄うかが問題だ。UNHCRはNGOを通じて、環境保全のために、薪を集める場所を広く設定し、枝だけ取るなど、環境に優しい木の利用法を教えている。薪の使用量が半分で済む泥かまどの作り方・使い方の指導は今年7月に始まり、今では約100家族が使用中。その数は増える傾向にある。

生理用ナプキンも去年から配られている。厚く重ねた布地にひもがついた形で、繰り返し洗って使える。共同の洗濯場で洗えないため、今年から洗濯用バケツと一緒に配っている。その数は、

生理用品が必要な女性の数と比べると少ないが、女の子を学校に通いやすくさせるという効果もある。

性的暴力、家庭内暴力（DV）やレイプなども、人が密接して暮らすキャンプ社会では起こりやすい。多くの場合、犠牲になるのは女性である。今年6月からはNGOの訓練を受けた難民が、性的暴力委員会を設立し、被害者のカウンセリングにあたっている。二か月前のレイプ事件を家族がそと委員会に持ち込んできたりと、その相談役的存在が少しずつ認められ、相談件数は増えている。キャンプに駐在するザンビア警察の協力で、ザンビアの法律による検挙もより効率的にできるようになった。しかし夫に暴力を振われたと相談してきた妻が、いざ委員が話を聞こうとすると相談を取り下げたこともある。持ち込まれるケースはまだ氷山の一角であり、夫が妻を

殴るのは当たり前という男性中心社会で、人々の意識が変わるのに時間は要するだろう。

難民問題は、ザンビアにとって決して新しいものではない。1964年の独立以降、アンゴラ、モザンビークなどから、繰り返し難民の流入があった。UNHCRがザンビアに事務所を開いたのは1967年のことだ。

現在、アンゴラ難民が多い西部では、政府や他の国連機関と協力して、難民と難民の受け入れ社会の援助と開発のニーズに応える「ザンビア・イニシアティブ（p.7参照）」が進んでいる。長期的な難民

問題を解決しようとするこの包括的アプローチには、日本を含む支援諸国、そしてJICA（国際協力事業団）の働きが大きい。

6月に着任してやっと3か月。帰還民のモニタリングには4年間携わったが、キャンプを担当するのは初めて。毎日がドラマだというのが素直な感想である。コンゴ難民は率直に自分の意見を主張する。真摯に対応すれば、それなりの反応がある。自分のコミュニティを良くしようと無償で働く人もいれば、見返りがないと文句をいう人もいる。難民の中に知った顔が増えるにつれ、少しずつ深まる信頼関係を感じる今日この頃である。

キャンプは、不安定な飯の住まいである。しかし好意的に見れば、祖国では限られていた教育、医療保健などのサービスが受けられる。ここで、様々な知識と技術を身に付け、帰還した後には祖国の平和と発展の礎となって欲しいと、難民の明るい笑顔を見るたびに、切実に願っている。



ザンビア・
カウンプア支所
フィールド担当官

斉藤香織

Profile

さいとうかおり
1971年生まれ。ミシガン大学卒。
エール大学にて公衆衛生修士号
を取得。1997年、JPOとして
UNHCRのミャンマー事務所の職
員に。その後、2000年8月から12
月まで世界食糧計画（WFP）の職
員としてアンゴラ事務所勤務。翌
年、UNHCRに戻り、グルジア、
パキスタン事務所勤務を経て現
職。UNHCRの職員となった理由は
、現場志向の強い機関であるか
ら。



学校に集まった生徒たち。
UNHCR/K.Saito